

期 日 二〇二三年十月八日(土)・九日(日)
会 場 早稲田大学早稲田キャンパス・オンライン併用

日本中国学会
第七十四回大会要項

日本中国学会

パネルディスカッション（次世代シンポジウム）

日本漢学を／で考える

司会・コメンテーター…長尾 直茂（上智大学）

高山 大毅（東京大学）

報告者…韓 淑婷（関西大学）

宋 哈（フェリス学院大学）

水上 雅晴（中央大学）

日本漢文部会は、二〇一〇年の第六十二回大会で初めて設置され、今年で十二年を迎える。大会案内などに「日本漢文（日本漢学・日本漢詩文・漢文教育など）」と注記されているように、本部会は日本列島における古典中国語（漢文）を用いた文化営為を広く対象領域としている。発足以来、多くの充実した報告が行われ、現在、日本漢文部会は日本中國學會にとって無くてはならない存在になっている。今年度、本学会が新たに歴史部会を設置し、さらなる一步を踏み出すに当たって、日本漢文部会の十二年を振り返り、本学会の今後のあり方について考えるのは有意義なことであろう。そこで、このパネルディスカッションでは、日本漢文・日本漢学に関して、近年優れた研究を発表している三氏に報告をお願いし、日本漢文部会の「現在地」を示すとともに、本学会の対象領域に関する研究の来し方行く末を議論したいと考えている。

先ず、宋哈氏の報告では、平安朝漢詩文における「美意識」と「表現」の関係を取り上げる。平安朝漢文学に関しては、六朝隋唐文学との比較研究の豊かな蓄積がある。ただし、このような比較文学型の研究は、時に紋切り型の日中文化論に陥ってしまうことがあつ

た。そこで本報告では、詩壇の人間関係や相互批評に着目することで、当時の詩人たちが有していた「美意識」と彼らの「表現」の相互作用に分析の光を当てる。

続いて、韓淑婷氏の報告では、江戸期における儒礼受容を検討する。近世日本社会の儒礼の受容は限定的であったこともあり、かつては江戸期の儒礼の研究は盛んではなかった。しかし、この十年、江戸期の儒礼研究は大きく進展し、江戸期の儒礼受容を「例外的事象」として無視することは不可能になっている。本報告では、研究史を概括した上で、儒礼が政治的文脈の中で語られる事例に注目し、江戸期の儒礼言説の意味について考える。

最後の水上雅晴氏の報告では、パロディ作品に着目し、江戸期の俗文学と日本漢学について考察する。パロディ作品の出現は、広い範囲で共有されているテキストの存在を前提としており、日本において漢学に関わるパロディ現象が広く見られるようになるのは江戸期に入ってからである。本報告では、洒落本・落書・川柳などの通俗文芸におけるパロディを検討し、近世日本における漢学享受層の拡大状況の一端を明らかにする。

日本列島の漢学的諸文化を検討する（「日本漢学を考える」）だけでなく、それらを研究することで中国学研究に対していかなる寄与が可能なのか（「日本漢学で考える」）についても議論の俎上の載せることで、本部会と他部会との関係についても新たな視点を提示できらるであろう。